

PROFILE

神谷 温之

北海道大学大学院医学研究科



平成16年2月16日付けで北海道大学大学院医学研究科神経機能学講座分子解剖学分野を担当することになりました。当研究室は旧第一解剖学講座の流れを受け継ぐ教室で、先代の井上芳郎教授は神経解剖学を専門とされてきましたので、大きく方向性を変更してスタートを切ったところです。私が大学を卒業した十数年前までは、形態学としての解剖学と、機能学としての生理学は、専門性の高い独立した研究領域として明確な分担があったように思います。それが、昨今のGFP標識法に象徴される分子イメージングの興隆で、生理学者が解剖学に、解剖学者が生理学に守備範囲を拡げ、ボーダーレス化が進んでまいりました。このような研究の流れを反映して、生理学畑を歩いてきた私が解剖学の研究室を担当する機会をいただけたものと理解しています。その期待に応えるためにも、ぜひ活気のある魅力的な研究室を築いていかねばと感じています。

私は、金沢大学を卒業後、母校の生理学教室に入り山本長三郎教授に師事いたしました。世界に先駆けて脳スライス法を開発された山本教授に直接実験の手ほどきをいただき研究生活をスタートできたのは、何より幸運であったと思います。世界的なパイオニアでありながら、日々着実に研究に打ち込まれる山本先生の研究スタイルへの憧れに近い感情が、現在まで私の研究生活を支えています。その後も、カリフォルニア大学パークレール校への留学ではRobert Zucker教授に、群馬大学では小澤滯司教授に、神戸大学では真鍋俊也教授と清野進教授にご指導を仰ぎました。いずれも世界的に高名な先生ばかりで、改めて偉大な学問の

先輩に出会えた幸運を感じています。ぜひとも、これから出会う後進にも研究の楽しさと厳しさを伝えていくことができれば、と思っています。

私は学生時代から漠然と脳に興味を抱き、脳機能の分子的基盤に迫りたいと考えて、神経研究の道を選びました。その中でシナプス研究の魅力に取り付かれ、今日までシナプス可塑性の細胞・分子機構に関する研究を進めてきました。いささか乱暴な私論ですが、現在のシナプス研究にはある種の閉塞感を感じています。私自身、脳スライス法、パッチクランプ、カルシウム測光、遺伝子ノックアウト、GFPイメージングなどに次ぐ、大きなインパクトを持った新たな方法論を待望しています。日々の研究に埋没せず、シナプス研究の進展に本質的な貢献ができるよう、積極的に新たな方向性や可能性を探っていきたいと考えています。

解剖学の研究室に赴任し当初は若干戸惑いを感じましたが、逆に、この機会をこれまでの自分の殻を破るチャンスと捉えたいと考えています。形態と機能は対立語ではなく、どちらも生命現象を理解するための視点に過ぎないと考えます。これからも、生理学者としてのマインドを忘れずに、研究・教育に専心していく所存です。会員の皆様には、変わらぬご支援とご指導をいただけますようお願い申し上げます。

略歴

昭和62年3月 金沢大学医学部 卒業
昭和62年4月 金沢大学医学部 助手（生理学第二）

平成4年2月	カリフォルニア大学バークレー校 博士研究員 (神経生物学)	平成12年11月	神戸大学医学部 助教授 (生理学第一)
平成8年4月	群馬大学医学部 講師 (生理学第二)	平成16年2月	北海道大学大学院医学研究科 教授 (分子解剖学)